未来を開くきっかけとしての建築：スリランカ旧紅茶農園長屋再生プロジェクト

大庭徹建築計画 **大庭　徹**（おおば　とおる）
京都大学 **前田　昌弘**（まえだ　まさひろ）

スリランカの紅茶産業を支えてきた人々

紅茶は17世紀頃からヨーロッパで愛飲されるようになり、東西の交易や文化交流において重要な役割を果たしてきた。スリランカ産の紅茶もその一端を担い、世界史の中で重要な位置を占めてきた。「スリランカ」と聞いてもどんな国かピンと来ない人も、「セイロンティー」の産地と言えば、少しイメージが湧いてくるのではなかろうか。ところが、スリランカの紅茶産業をどんな人々が支えてきたのかということについては、少なくとも日本ではほとんど知られていないように思う。

本稿で紹介するプロジェクトに携わるまではわたしたちも同じような認識であったが、半ば偶然にもスリランカの紅茶産業を陰で支えてきた人々と触れ合う機会を得た。現在、紅茶農園の労働者として19世紀末にインド南部から移住してきたタミルの人々の生活を支えるために、彼らが住み続けてきた築130年以上の長屋の再生に携わっている。スリランカとは縁もゆかりもないわたしたちが現地では”負の遺産”と捉えられている紅茶農園に住む人々の支援にどのような形で関われるのか、時には戸惑いを感じながらも試行錯誤を続けている。

ここでは、現在進行形の取り組みを通じて、建築と時間、あるいは建築と支援といった観点から、“未来を開くきっかけ”としての建築の可能性について考えてみたい。

“負の遺産”としての紅茶農園とその将来

スリランカの紅茶産業はかつて世界有数の生産・輸出量を誇ったが、近年は茶樹の老朽化や経営主体の弱体化等の理由により衰退傾向にある。紅茶産業の衰退に伴い、紅茶農園の中でも国土中央の高地・中間地にある大規模農園（プランテーション）をめぐる状況は特に不安定・不確実である。わたしたちが活動のフィールドとしているバウラーナ村（中央州キャンディ県デルトタ郡）は、1883年に当時のイギリス植民地政府によって開設された、スリランカで最初期の紅茶プランテーションである。バウラーナ村もかつては紅茶産業で賑わったが、上記と同様の理由により徐々に衰退し、1980年代初頭には紅茶農園としては完全に閉鎖されてしまった（写真１、写真２）。その後、政府や民間企業が香辛料栽培や松の植林等、紅茶生産に代わる新たな産業を導入しようと試みてきた。しかしながら、それらはいずれも成功しているとは言い難く、住民の生活はますます不安定になっている。

写真1　バウラーナ村の景観
かつて紅茶畑だったところは、現在は山肌が見えるほど荒れてしまっている。

写真2　バウラーナ村の長屋
村には築100年を超える長屋が13棟現存している。

バウラーナ村のような衰退・閉鎖した紅茶農園を、将来にむけて解消すべき、植民地時代の“負の遺産”と捉える見方も現地では根強く存在している。このような、“負の遺産”の象徴である紅茶農園の長屋を解消するという未来も確かにあり得るだろう。政府による環境改善プログラム等においても、老朽化した長屋は解体され、長屋の住民は政府が別の場所に築造した戸建て形式の住宅地へ移住する措置がとられている。一方で、後で述べるような紅茶農園に残された生活文化の価値に着目すると、紅茶農園の長屋を将来にむけて維持・継承していくという未来もあってよいのではないだろうか。さらには、紅茶農園の長屋を維持・継承することは、紅茶産業を陰で支えてきたタミルの人々の記憶を未来へと繋いでいくことになる。このことは少し大袈裟に言えば、紅茶を愛飲する全世界の人々が記憶に留めておくべき歴史の断片を拾い集める作業にもなるのではないだろうか。このような想いから今回、わたしたちは現地で活動する日本のNGO（アプカス）との協働により、長屋再生プロジェクトを立ち上げたのであった[1)]。

不確実な未来に向き合うためのプロセス・デザイン

わたしたちはまず、シナリオ・プランニングという手法を用い、バウラーナ村の維持・再生にむけて複数の将来シナリオを描いた。大まかに言うと、バウラーナ村をめぐる状況変化の要因として①人口動態（停滞・減少or増加）、②コミュニティの開閉（オープンorクローズド）の2点を取り出し、その組み合わせによって、4つの将来シナリオを描いた（図1）。そして、村の現状を踏まえ、

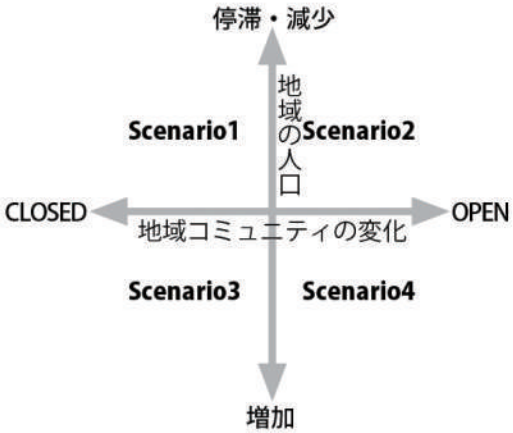

図1　将来シナリオ・マトリクス

定住人口はこのまま停滞あるいは緩やかに減少するが、一方で、紅茶農園のコミュニティが今よりも外部に対して開かれ、交流人口の増加や新しい産業の導入が見込めるというシナリオを今回は採用した（図1のシナリオ２）。さらに、このシナリオにもとづき、ある長屋を地域ツーリズムの拠点として再生する計画を立案・実施している。

シナリオ・プランニングは不確実な状況下における意思決定手法であり、その根底にある態度は、未来は決して予測できないという人間の能力や科学技術の限界を受け入れた上で、不確実な未来に向き合い、できる限りの備えをするというものである[2)]。バウラーナ村の再生においてもこのような態度が重要であると感じ、わたしたちはシナリオ・プランニングの手法を計画に取り入れたのであった。計画段階で複数の将来シナリオを描いておくことで、もし想定していたものとは違う未来や、想定さえしていなかった未来が到来したとしてもそれらに対処できる柔軟性が計画に備わっていくことを意図した。

３つの文化の融合からなる長屋

バウラーナ村の長屋の特色は、紅茶農園の成り立ちと歴史に由来する要素がかたちとして表れている点である（図２）。具体的には、①紅茶農園をこの地に導入したイギリスの技術：スチールフレーム、②農園労働者として長屋に住み続けてきたタミル人の生活文化：ヒンドゥー教に根差した壁や土間の仕上げと手入れ、③スリランカの自然と気候・風土：ヴェランダ空間や地場産の石積みの壁、という3つの要素である（図３）。この長屋は、いわゆる「コロニアル建築」の一種であるが、130年以上に渡って住み続けられてきた結果、かつての農園労働者であるタミル人の居住の痕跡

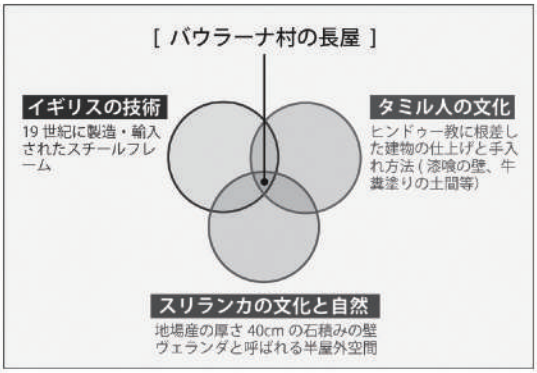

図２　３つの文化の融合からなる長屋

図３　長屋の建築に現れる文化

と生活文化が建築空間に色濃く映し出されているところが特筆すべき点である。

長屋の再生を通じたコミュニティ支援

1980年の紅茶農園閉鎖以降、バウラーナ村では住民の貧困化や人口の過疎化に伴い長屋の老朽化や滅失が進んでいる。長屋の住民であるタミル人は、19世紀後半にインド南部から紅茶農園の

労働者としてスリランカに移住してきた。彼らは、1980年末頃まで無国籍状態が続き、また、インドにも帰る場所を失っている。そのような境遇の彼らにとって、長年住み続けてきた長屋は、辛い過去の記憶の一部であるかもしれないが、一方で、アイデンティティの拠り所にもなっているように感じられる。プロジェクトでは、このような価値を持つ長屋を維持・活用し、地域コミュニティへの様々な支援を行う。具体的には、再生された長屋を拠点として、紅茶農園の開発に由来する村の歴史・文化・自然、および長屋等の建築群を見所とした地域ツーリズムを導入・展開する。

導入する地域ツーリズムでは、住民がその運営の一部を担い、安定的な収入を伴った雇用の機会が創出される。そのような意味で、長屋の再生が村のコミュニティへの経済的な支援となることが期待される。また、これまで閉鎖的であった村のコミュニティが外部に開かれ、村を訪れた人々と住民の交流が活発になることで、紅茶農園の“負の側面”だけではなく、村の歴史・文化といっ

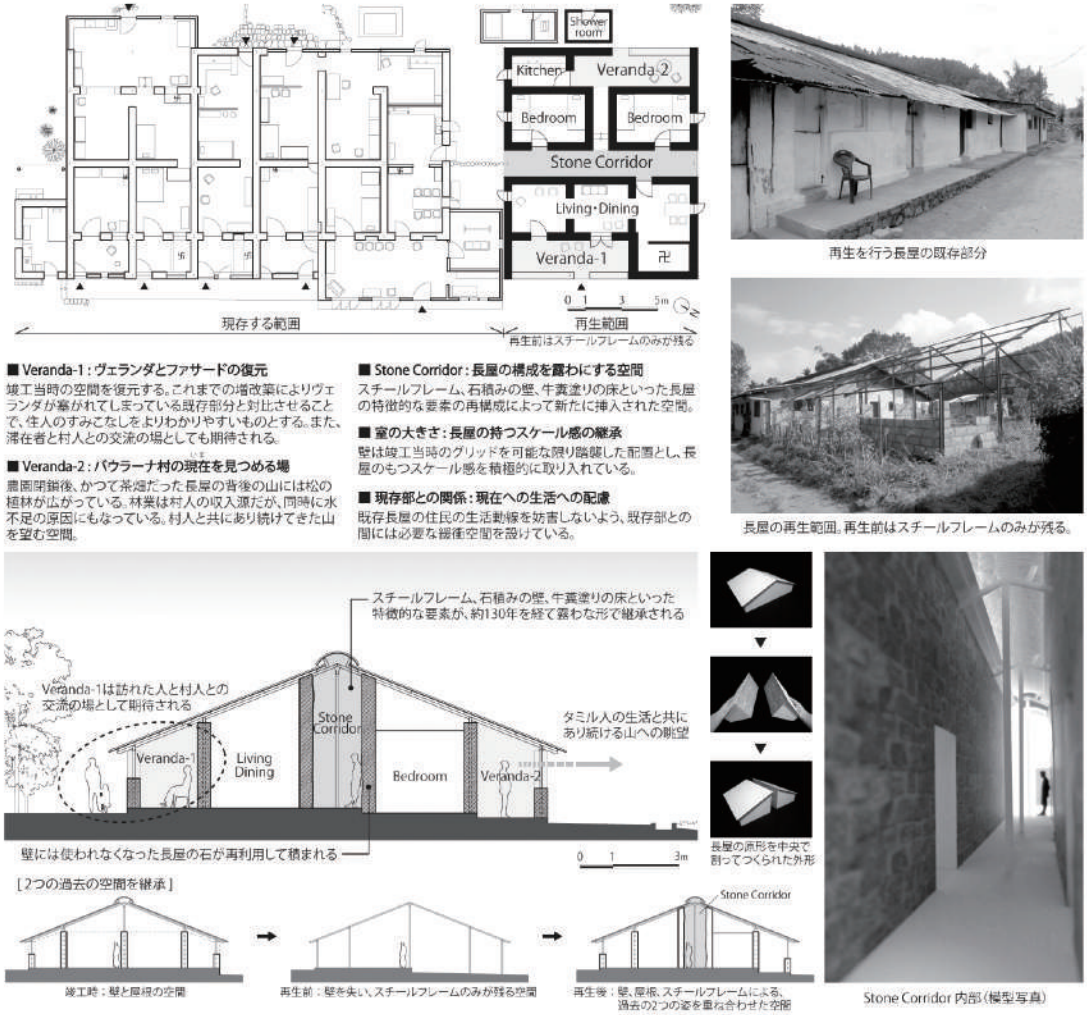

図4 「復元」と「特徴的要素の再構成」の2つアプローチによる再生計画案

た“正の価値”が再発見される。このことによって、長屋の住人であるタミル人のアイデンティティが再認識・強化され、コミュニティへの精神的な支援となることをわたしたちは望んでいる。なお、再生された長屋は住民自身が管理し、来訪者の受け入れ等も行い、彼らを現地で活動する日本のNGO（アプカス）が継続的にサポートしていく予定である。

織り重なる歴史の新たな一歩として

プロジェクトで再生の対象とする長屋は、その約1/3が基礎とスチールフレームのみを残して失われている（図4）。なぜこのような状況になってしまったのだろうか。組積造の建物がここまで風化するとは考えにくい。長屋の長老に聞いてみたところ、以前、村の役人が自宅の建設用に壁の石を勝手に解体して持ち去ってしまったらしい。にわかに信じがたい話だが、村人からは他にも「えっ！？」と驚く様々なエピソードを聞くことができる。

また、長屋はよく観察してみると、この長屋が長い時間を経てきた痕跡を各所に見ることができ、各時代の生活に合わせた増改築が住民によって繰り返されてきたことがわかる。今回の再生案も、そのような長屋の歴史の延長と位置づけており、竣工当初の姿の完全な復元でもなく、過去と現在との対比を強調するようなデザインでもない。長屋の歴史とタミル人の生活文化を読み解いた上で、長屋の多面的な価値を顕在化させ、未来へと継承することを目指した。さらに、長屋の既存部分に今も住み続けている住民の生活にも配慮し、以下の3点を再生の基本方針としている（図4）。

1．長屋既存部分の住人の生活動線を妨げないこと。
2．現存するスチールフレームやその他の建材は、長屋のこれまでの歴史を伝える痕跡として、できる限り維持・活用すること。
3．長屋の空間構成や生活文化の特徴を引き出し、訪れた人々に伝えやすくすること。

写真3　現地で工事の打合せをする筆者ら

写真4　石運びを手伝う村の女性たち

再生の工事にもわたしたちは参加している（写真3，写真4）。今回の工事において壁に用いる石には、空き家や廃墟となった村内の長屋に使われていた石を可能な限り再利用している。石を拾い集める作業は村人たちに手伝ってもらったのだが、そのことが知れ渡ったとたん、村人の中には自宅の石を売りたいという人や、自宅でもない廃墟となった長屋の石を高値で売り付けようとする人が現れ、その欲深さに正直驚き、困惑してしまった。NGOの方によれば、こういった話はよくあることのようで、村の経済的な貧困の根深さを感じ、わたしたちのような外部の人間が村人たちに及ぼす影響について改めて考えるきっかけとなった。

デザインという外野的行為とその役割

過去から現在において現地の人々とは時間も場所も共有していないわたしたちが、眼前の長屋とどのように関われば良いのか、正直に言うと戸惑いやある種の引け目のようなものを感じながらプロジェクトを進めている。デザインとはそもそもある種の介入行為であるが、わたしたちのような、バウラーナ村の人々にとってまったくの「外野」にはさらに高いハードルであるように感じられる。一方で、「外野」であるからこそできることもある。バウラーナ村において、“負の遺産”とも言える長屋を将来に引き継いでいくかどうかは、今後、住民や現地の人たちが決めていくべきことである。しかし、これまで紅茶農園の労働者として社会から遠ざけられてきた人々が村の将来像を自ら描くことは現時点ではまだ難しい。そのような中で、長屋の特徴を顕在化させ、その評価を問いなおす機会をつくることができるのは、わたしたちのような「外野」なのではなかろうか。旧紅茶農園の歴史やタミルの人々の生活文化を様々な視点や時間軸から評価することができれば、それはバウラーナ村の新たな未来を描く力になるはずである。建築を含む物や空間が存在することで、人々の記憶は維持されているという見方があるように、建築には本来、「記憶の器」としての役割が備わっている。わたしたちのプロジェクトでも長屋の建築にこのような役割を期待しているが、そのことに加えて、単に過去の記憶をとどめるだけでなく、未来に向けて新たな歴史がつくられる場所となることを信じている。今回の再生案に織り込まれたデザインがそのきっかけとなり、村の人々と「何か」を共有していきながら、村の未来をつくり、育んでいきたいと考えている[3)]。

謝辞：当プロジェクトは、LIXIL住生活財団、ならびに（公財）大林財団による助成と、一般の方々からのご寄付により実施している。ここに記して謝意を表す。

【注】

1) NPO法人アプカス（本部・函館）は、貧困削減や被災者支援等の分野で、スリランカにおいても10年以上の活動実績を有する。今回、スリランカ政府からの依頼によりアプカスがバウラーナ村で人々の生計安定化と紅茶産業再生を目指した活動を開始し、その活動に日本からわたしたち建築の専門家が加わっている。
2) シナリオ・プランニングはもともと軍事や経営の戦略に係る意思決定支援手法として開発され、近年は地域開発やまちづくりの分野でも応用されている（A. カヘン著，小田理一郎，東出顕子訳：社会変革のシナリオ・プランニング―対立を乗り越え、ともに難題を解決する，英治出版，2014）
3) 当プロジェクトの活動の様子については、特設HP（http://apcas.jpn.org/bawlana/）およびFBページ（https://www.facebook.com/BawlanaLineHouse/）をご参照ください。